

本人もご家族も気づかないものです。

もともと良く見えていたものがぼんやりとしか見えなくなってきたら「最近視力が下がったな」と気づくでしょうが、それはおとなの話。こどもの視力は新生児から3歳ごろにかけて急激に発達し、6歳前後で完成します。発達が遅かったり、片目の視力に問題があっても、それなりに見えているので、本人は不自由を感じないものなのです。

こどもの50人に
1人は弱視です。

3歳児の弱視は
見逃されがち。



弱視とは、
視力の発達が
途中で
止まること。

目だけでなく、
脳の発達も必要です。

視力とは、目だけの能力ではありません。
目から受け取った映像の情報を、脳が処理する
能力とセットです。脳は目から来る情報に刺激を受けて
発達します。ピントが合った映像が脳に送られないと、
脳の見る機能は十分に発達しません。



3歳児健康診査の結果、弱視の可能性を指摘されたら
速やかに眼科を受診しましょう。

弱視の治療って何するの？

異常を放置すると、脳の見る機能の発達も止まってしまいます。
弱視のほとんどは、治療用めがねをかけてピントが合った状態にすることで、脳が刺激され、視力が発達していきます。
3歳で治療を開始したことの多くが、小学校入学までにめがねを常用すれば十分な視力を得ています。

3歳から治療することを、
強くおすすめする理由。

治療にはタイムリミットがあります

成長するにつれて視力の発達はスローダウンして6～8歳で完了します。治療開始のタイミングを逃すと、思うように効果が上がらず、めがねやコンタクトレンズを使っても生涯十分な視力を得られないことがあります。

発達が途中で
停滞していても、
今なら再スタートできます。



視力 0.5

視力 1.0

これ以降、脳は視覚刺激を受けてもあまり反応せず
視力が発達しにくくなります。

視力 0.02

生まれた直後

視力の発達

6～8歳



名古屋大学医学部附属病院 眼科 安田 小百合先生

3歳児健診は、弱視早期発見と治療開始のための重要な機会です。弱視は放置すると、将来の視力に大きな影響を与える可能性があります。健診で指摘があった場合には、必ず眼科を受診しましょう。

モスバーガーは、子どもの目を守る活動を応援しています。

